



2008 平成20年

3

誌面に掲載した記事・写真等の無断複製・転載等はお断りします。お問い合わせ・ご意見は狛江市市民協働課へ

発行 ● 狛江市市民協働課
〒201-8585 狛江市和泉本町 1-1-5
☎ 3430-1111 FAX3430-6870
Email=wacco@city.komae.lg.jp

編集・制作 ● 特定非営利活動法人 k-press
〒201-0012 狛江市中和泉 3-2-16
プランツベルツ 201
☎ 3430-6617 FAX3430-6743
Email=wacco@k-press.net

2001年

川またぎ人々の暮らし支える 渡し舟・多摩水道橋



開通式 新しい水道橋の開通式には狛江の太鼓やみこしも参加、兩岸の市民による綱引きやダックレースなど多彩なイベントをくり広げ、完成を祝った

渡し舟・多摩水道橋

テープカット

1958年



水道橋の完成を祝いテープカット

● 写真中の数字は撮影された年

狛江は古くから江戸と相模を結ぶ街道が通る交通の要衝であった。しかし、狛江に限らず多摩川には渇水期を除いて橋がなく、長い間、対岸へ行くには渡し舟に頼っていた。昭和2(1927)年になって小田急電鉄が開通、電車で渡れるようになったが、狛江と対岸の川崎を結ぶ登戸の渡しは、その後も四半世紀にわたって人々の生活の足として利用された。戦後になって、都の水不足解消

のため、相模川の水を東京へ運ぶ水道管の敷設に合わせて、片側1車線の車道と両側に歩道を設けた橋を架けることになり、28年に多摩水道橋が開通、登戸の渡しは廃止となった。都市化の進行にともない水道橋は車の通行量が増え、渋滞が激しくなったため、片側2車線にする橋の拡張が行われた。新しい水道橋は平成13(2001)年に完成、日常茶飯事だった渋滞もほぼ解消された。



登戸方面への移動が便利に

小川博道さん(81歳・岩戸南)の話 初代の水道橋が完成したとき、3世代夫婦の狛江側の代表に選ばれて渡り初めをしました。渡ったのは、祖父の市五郎(当時75歳)、祖母のよね(73歳)、父の利太郎(52歳)と母のきみ(50歳)、私(27歳)、妻のさわ(25歳)の6人です。当時は人口が少なく、3世代そろっている家も2軒しかなく、うちが選ばれたようです。狛江側で神主さんか祝詞をあげた後、川崎側から選ばれた田村さんという中野島の一家と一緒に渡りました。当時の建設大臣も参列してましたね。歩いてみると、けっこう長いように感じました。昭和12年から運送業と建材店をしていて、それまで二子橋を使っていましたが、登戸方面へトラックで行くのが便利になりました。まだ車が少なく、対向車に合うこともほとんど



初代・水道橋の開通式 橋を渡る小川さんら3世代家族

どありませんでした。橋ができて登戸の渡しは廃止になったため、船頭をしていた親子にうちの会社で働いてもらいました。

記念の漆塗りの杯は家宝に

小川さわさん(79歳・岩戸南)の話 潮見台(川崎市宮前区)の生まれで、結婚して狛江にきました。渡り初めに選ばれ晴れがましい思いで、ほんとに名誉なことだと思いました。12月でしたが、おだやかな天気で、寒くありませんでした。橋を渡ったときは、鉄橋のようですごく丈夫にできていると感じました。記念にいただいた三重の漆塗りの杯(写真)は、まだ物資が豊かではなかったがにうれしくて、家宝としていまでもお正月に飾っています。橋ができる前の年に、自転車で実家へ帰るため、渡し船に1回だけ乗りました。料金は人と自転車は別でした。川幅が狭くて、対岸まではあっという間でした。



開通式に出席した谷田部圭子さん親子(左の2人)と高橋雅子さんと祖母

テープを持つ役目に緊張

谷田部圭子さん(64歳・元和泉)の話 小学4年生の時に、第一小学校の代表として初代の橋の開通式に参加しました。晴れの席ということで、着物を着ていきました。父母も出席するため忙しくて、近所の奥さんに着付けや化粧をしてもらいました。式典ではテープカットのテープの端を持つ役でしたが、緊張しました。父の錦三は当時議員をしていて、テープこハサミをいれました。晴れがましい思いと、着物を着たのがうれしくて、橋のことはあんまり覚えてないんです。

開通式典が友情の橋渡し

高橋雅子さん(旧姓・小町、64歳・和泉本町)の話 第二小学校の代表として谷田部さんと一緒にテープを持つ役を務めました。母に着物を着せてもらい、祖母と参加しました。七五三の時の着物で、母が出産直後で直す時間なかったため袖丈が短いままで、ちょっと恥ずかしかったです。多摩川へはよく遊びに行っていたので、橋を見てすごいものができると思いました。谷田部さんとはこのとき初めて会ったのですが、その後、中学と高校が一緒で、お友達になりました。水道橋が友情の橋渡しをしてくれたみたいですよ。



初代・多摩水道橋 1990年

車で混み合う多摩水道橋。片側1車線、上下線とも渋滞が日常茶飯事だった

登戸の渡し



川崎側から狛江へ向かう渡し船。右は小田急線の鉄橋

農家に重宝がられた渡し舟

井上昭一さん(75歳・元和泉)の話 小学4年か5年生のころ、遊び友達のお父さんが登戸の渡しの船頭だったので、そのお父さんが急用や体の具合が悪くなったときに、頼まれて手伝いました。友達とふたりで舟をこぎましたが、舟の扱い方は見よう見まねで覚えました。戦争中のせいで、客はあんまり多くなかったのですが、野菜や肥料、家畜の飼料をリヤカーで運ぶ農家や自転車の人は、電車に乗れないので、よく利用しました。舟は1艘で、大きかったですね。狛江側の小田急線多摩川鉄橋上流の河川敷に置1枚分ぐらいの船頭小屋があって、日の出から日没ごろまでお客を待っていました。舟を出す時間は決まっていなくて、お客次第でした。狛江側で乗る人は小屋に声をかければよいのですが、川崎

側からは大きな声や身振り手振りと呼ばなければいけません。料金は人、自転車、リヤカーなど種類別に決まっていた。



1937年



戦前の登戸の渡し。上は自転車を載せて運ぶ渡し舟。対岸に船頭小屋が見える。下は渡船場の看板

知り合いに祝福され感激

間鍋伸一さん(64歳・駒井町)の話 新しい水道橋ができたとき、父の喜代治(当時86歳)、母の正子(86歳)、妻の菊江(56歳)、長男の陽(28歳)とその妻のゆりか(28歳)の3代で渡り初めをしました。狛江の代表として橋を渡り、たくさんの知り合いから祝福されて名誉なことだと感じました。記念品として、橋にちなんで箸をいただきました。子どものころに登戸(川崎市多摩区)のお婆の家へ行くとき、渡し舟に乗った覚えがあります。おじからは、親類から借りた牛を渡し舟に乗せるとき、牛が嫌がって動かず、すごく苦労したという話も聞きました。



渡し初め 2001年

花束を持って多摩水道橋を渡り初めする間鍋さんら3世代家族

写真提供・取材協力=小川博道、小川さわ、谷田部圭子、高橋雅子、井上昭一、間鍋伸一、木下和信、谷田部公司、川崎市多摩区役所(順不同敬称略) 資料=『狛江の民俗Ⅳ』(朝動) (狛江市)